南米の旅 （その１　ペルー編）

■２０１４年２月６日（ペルーへ）

３度目の南米への旅。

退職して自由な身になっても、１ヶ月間海外へ行くというのは案外難しいものだ。いろいろな環境整備，スケジュール調整，健康管理などが必要である。今回スケジュール的に、２月６日から３月６日までの１ヶ月間日本を離れることができた。この旅で心配なことが３つあった。

まず、入国してわずか数日間だが滞在するペルー（リマとアレキパ）の治安である。事前情報はインプットしたし充分注意するつもりだが、それでも何が起こるかわからない不安がある。

もう一つはパタゴニアの気候だ。南米は夏なのだが、パタゴニアはかなり寒い。２月の平均気温を調べると最高，最低気温の平均は夏のパタゴニアと冬の東京がほぼ同じだ。今日２月６日の東京の朝の気温を２.３度とニュースで伝えていたが、このくらいの気温だとかなり寒い。それにパタゴニア特有の強風が加われば、体感温度はさらに低く感じるに違いない。荷物はできるだけ少なくしたいので、厚いセーターなどは持っていきたくない。ウインドブレーカーと保温性のよい薄手のセーターを組み合わせるつもりでいる。冬の房総半島徒歩横断の時と同じ方法で防寒対策をすれば大丈夫だろう。

最後に、体調を損なわずスケジュール通りに旅が進められるかどうかということだ。今回は日数に余裕を持たせたので問題ないはずだが、思ったとおりにいかないのが南米である。途中で病気になったりフライトに欠航などがあれば、たちまちスケジュールの修正を迫られることになる。

さっそく出発前に１つ問題が発生した。アメリカはトランジットでも入国手続きが必要だが、それを搭乗手続き前にしておかなければならないことになっていた。以前はアメリカに着いてから空港でできたはずだったが、いつからか規則が変わったようだ。カウンターの女性係員が親切に教えてくれ、空港内に設置されたパソコンで申請ができたので何とか事なきを得た。焦る手で操作して１５分かかったが、これも空港に時間の余裕をもって着いていて良かったが、ギリギリに到着していたらかなり厳しかったかも知れない。

１２時間半のフライトでデルタ航空０２９６便はアトランタ空港に到着。デルタ航空の乗務員は年配の人が多く、余裕を持って楽しく仕事をしている姿はとても好感が持てた。

今回の成田からアトランタの１２時間半は比較的短く感じた。隣はとても礼儀正しい青年だった。彼は次の便まで１時間しかないと言っていたが間に合ったのだろうか？ 私の座席の周りはグアテマラ，ベリーズに行く、ルックＪＴＢツアーの熟年グループだった。みなリタイアした人たちだろう。

アトランタ空港は世界一周の時に来て今度で二度目だ。その時はメキシコシティに向かったのだった。アメリカの空港はいつもそうなのだが、トランジットでも入国審査があるので、指紋を取ったり顔写真を撮ったりで時間がかかる。これまではいつも時間がなく焦っていたが、今回は乗り継ぎに４時間もあるので全く心配はない。アトランタ空港で働いている人々は圧倒的に黒人が多い。Ｅ７ゲートで１７：２０分発のリマ行きを待っているが、徐々に乗客が集まり始めている。その中に日本人の若い女性が一人、懸命にパソコンをたたいているのに気付いた。そこへペルー人らしい顔をした一人の若者が近づいて話している。女性も若者も英語はペラペラのようだ。女性はこれから行くペルーの情報を知りたいと思っているようで、二人の話は弾み時折笑い声を上げながら楽しそうに話している。

リマ行きＤＬ１５１便は定刻より２０分遅れて離陸。一旦坐った席を子供連れの母親のために一列後ろの席に移って欲しいとのことで移動した。隣はペルー人の老女だった。そんなことはどうでもよかったが、乗務員は無理を言って代わってもらったお礼に、ファーストクラスの乗客に配る小型ポーチに入ったアメニティグッズをくれた。

アトランタからリマへは６時間半のフライトである。窓側の席は少し寒かったが、足元に毛布を巻き音楽を聴きながら時々居眠りをしている間に着いた。

１２時間半のフライト、４時間の待ち時間、その後また６時間半のフライトだったが思ったほど疲れはなかった。少し腰が痛い。隣の老女とは着陸前のほんの僅かな時間話した。アメリカ人と結婚してアトランタに住んでいる姪に会いに来たということだった。彼女はペルーのトルヒーリョの生まれと言っていた。

ＤＬ１５１便は定刻０：１０分に到着。入国審査の直前で、さっきアトランタ空港で見かけた日本人の女性がいたので、市内までどう行くのか訊くと実は困っているとのことだった。

タクシーをシェアしないかと誘ったところ渡りに船とばかり応じてくれた。ペルー人の若者を加えて３人でタクシーをシェアして市内に入ることになった。

１００ドルをペルーの通貨「ソル」に交換、１ドル２.６ソルだから１ソル約４０円である。ペルー人の若者（エマーソン君）のバッグが壊れていたりしてその手続きに時間がかかり、時刻は午前１時をとっくに回っていた。しかし、現地の事情を知るこの若者がいてとても助かったのである。オフィシャルのタクシーは安全だが、何と！７０ドルとのこと。これでは高すぎる。ペルーのタクシーは危険なので空港の外ではタクシーを拾わないことなど、事前情報でわかっていたが、これではそういう情報を悪用したボッタクリである。すべてエマーソン君に任せ、結果的に４人（実はエマーソン君の彼女が迎えに来ていた）と全員の荷物が乗せられる大型車で６０ソル（２，４００円ほど）で行くことに決まった。

日本人の女性（Ｎさん）といろいろ話をした。ＯＬを辞め１年かけて憧れていた世界一周をするのだという。まずは南米を回り次にヨーロッパ、そして最後はアジアという大まかな予定である。彼女はサンディエゴの大学に留学していたことがあるとのことで、英語はペラペラだがスペイン語は全くだめ。

女性の一人旅で、いきなり治安の良くないペルーとは大胆で勇気があると感心した。勿論、彼女もリマの治安が悪いことは良く知っている。今回の便は深夜に着くので、空港で一夜を明かし朝になってから市内に入ろうと考えていたそうだ。しかし、エマーソン君と知り合い私と合流したことによって、深夜でも安心して市内に入ることができるようになったのだった。彼女はホテルの予約もしてなかったので、エマーソン君にガイドブックから手当たり次第に電話をしてもらっていた。しかし３，４件断られ、仕方なく市内に入ってからエマーソン君に探してもらうことにしたようだ。

私は予約したホテル（ホテルチョルカーナ）で最初に降ろしてもらい彼らと別れた。ホテルに着いたのは午前３時を回っていたが、ホテルの主人は“待ってましたよ”と丁寧に迎えてくれた。治安のことでイメージの悪かったリマだったが、その主人のお陰でリマのイメージが好転した。

彼女には元気で事故なく旅を続けて欲しい。ブログをアップしているとのことなので、今後の動静を知ることができるだろう。結局３人で同じホテルに泊まったのだということを後で知った。

２月７日（金）リマ

７：３０分起床、昨日遅かったのでゆっくり眠りたかったが、結局３時間少ししか眠れなかった。荷物の整理をして１階で朝食。パンとコーヒーそれと卵料理。フレッシュジュースがうまい。

今回の旅行はペルーがメインではないので、リマについてはガイドブックなどで調べていなかった。ホテルの主人に訊くといろいろ親切に教えてくれた。

９時にホテルを出る。歩いて５分ほどの Parque Kenedy（パルケ・ケネディ：ケネディ公園）から市内観光バスが出るとのこと。ケネディ公園はすぐわかった。もう街は活気づいている。

１０時発の遊覧バスに乗る。４時間コースで３０米ドル。乗客は１１名、女性ガイドが英語とスペイン語で説明してくれる。しかし、説明の内容はあまり面白くなくよくわからない。

風を受けながら走る

ミラバス

まず、ミラフローレス海岸を走りインカ時代の遺跡に行く。なだらかな丘になっていて、丘の上まで上ると海が見え数百メート

ル沖に２つの島が浮かんでいるように見える。今日は天気がいいのでとても美しい景色だ。リマの海岸はとても変化があって美しい。バスの屋上に出るとかなりの風を受け、オープンのバスに乗っているということを実感する。

マリネラの踊りの後で

次はミラフローレス地区から離れ、レストランに併設された広場で簡単なショーを見る。馬に乗った男性と民族衣装の女性が、ペルーの民族音楽マリネーラに合わせ踊るもの。これが終わると一人ずつ撮影タイム。私も店の人に撮ってもらった。それが終わるとレストランで食事。私はオリージャ・マリスケーラという料理を注文。エビ，イカ，タコなどがジャガイモを上にして串に刺され、ハーブの香りと僅かに塩味がついていてとても美味しかった。冷えたビールとの相性は抜群。

日本人のような顔の女性が一人いたので話しかけてみたが、「No entiendo（わかりません）」という返事で日本人ではなかった。独りで寂しそうにハンバーガーのようなものを食べていて、あまり言葉ができないようなので少し心配になった。

１時間ほど休憩が含まれていたせいか、４時間はあっという間に過ぎた。再び来た道を戻りパルケ・ケネディで解散。

書店で地図を買いまず海岸の方に行ってみる。海はすぐ近くで、歩いて１０分ほどの距離だった。着いたところは恋人岬で行こうと思っていた場所だった。そこには、恋人どうしが抱き合っている生々しい像があり、昼間から恋人らしきカップルが何組もいて人目を憚らず体を寄せ合っている。

ミラフローレス海岸

このミラフローレス海岸は切立った崖になっていて、緩やかにカーブしてとてもスケールが大きい。

この海の向こう何千キロもの先には日本がある。次に旧市街に行ってみる。

タクシーを捕まえて「Plaza de Armas（プラサ・デ・アルマス：アルマス広場）」というと、「リマの？」と訊きかえされた。他の街のアルマス広場のはずはなく、当然リマのアルマス広場なのだが、訊きかえされるほどここから離れていて遠いということか。

事前の値段交渉で２０ソル。時々珍しい建物などが見えると私が名前を訊くので、運チャンは目ぼしい施設があると自発的に教えてくれるようになった。中でもサッカースタジアムはとても大きくて立派だった。高速道路のような道を北の方向に２０分ほど走りやっとアルマス広場に着いた。

アルマス広場

旧市街に入ると歴史を感じさせる重厚な建物が多く、たくさんの人で賑わっている。広場の周辺を歩く。大統領府では衛兵交代の儀式が行われている。

インターネットを調べると、アルマス広場の治安が悪いことがしつこく書かれていたので警戒心を持っていた。しかし、実際はこの辺りは警官が何人も警備しており全く危険を感じることはなかった。

日差しが強く、直射日光に長時間あたったのですごく日焼けしてしまった。夕方になり戻ろうと思うが、タクシーで帰るのでは能がないので、来る時から気になっていた２連バス（メトロポリターノ）で帰ろう。

このバスは専用レーンを走るので渋滞に関係なく速くて便利だ。停留所で磁気カードを買おうと教えて

もらい、１０ソル紙幣を販売機に入れたら、エラーになってしまいメッセージが出て販売機は使用不能になった。後から後から客が押し寄せてくるが、事情が分からずどうすることもできない。

傍にいた人が親切にそのメッセージカードを係員に見せて説明してくれた。すると係員が付いて来いという。すぐに来たバスに乗って次のセントラル駅で降り、払い戻し窓口まで案内してくれた。

アルマス広場

そこで係員は行ってしまったが、その窓口には多くの人が列を作っていた。とても待てないし理由を説明するのも難しそうなので、結局返金は諦めざるを得ない。今度はそこから自力でバスに乗らなければならないが、磁気カードで改札口を通過しない限りバスには乗れない。ところが自動販売機で磁気カードの買い方がわからないのだ。仕方なく通りがかりの人に頼み、２ソル渡してその人の磁気カードで改札を開けてもらいやっとバスに乗ることができた。バスに乗ったのはいいが、今度はこのバスがどこまで行くのか、何というバス停で降りればいいのかわからない。とにかく見覚えのある景色になったら降りようと思っていたが、１０分ほど走ると終点に着いてしまいバスを降ろされた。

ミラフローレス地区に入っていることは間違いないが、どのあたりかわからないのでさっき買った地図で場所を示してもらった。そこはAv.Republica de Panama（アベニーダ・レプブリカ・デ・パナマ：パナマ共和国大通り）とPaseo de la Republica（パセオ・デ・ラ・レプブリカ：共和国通り）の交差点あたりで、ホテルからそれほど遠くないと思われた。もう少し北に行き、次に西に行けばホテルに戻れそうだ。

しばらく歩いてAv.28 de Julio（アベニーダ・28・デ・フリオ：７月２８日大通り）とRamon Ribeyro（ラモン・リベイロ通り）の交差点に出てやっと拡大地図で位置が確認できた。

しかしリマは思ったより広い。そろそろ日没だしここからもまだ距離がありそうなので、安全を考えてタクシーを拾うことにした。暗くなってから人通りの少ない所を一人で歩くのは危ない。空のタクシーがなかなか捕まらなかったが、何台目かに来たタクシーにやっと乗れた。

その運転手はホテルのアドレスを見せてもわからず、地図を見せてもCalle Libertad（カジェ・リベルター：リベルタ通り）という道が地図に載っていなかったりで、とにかく行ってみようということで走り始めた。流しのタクシーは危ない、つい先月エクアドルのグアヤキルで日本人が殺された事件も記憶に新しい。そんなことも頭を過ぎったが、このタクシー運チャンは明るくてそんな感じを全く抱かなかった。

途中警官に道を訊いてくれ、この地図は古いことが判明。“カジェ・リベルター”が変わる前の旧名称になっていると教えてくれた。走っているうちに見覚えのある景色になり何とかホテルに帰り着いた。料金は８ソルのところ１０ソル弾んだ。ホテルに戻ると、オーナーの主人がフロントでにこやかに迎えてくれた。本当に人懐こく愛想がいい。このホテルは夫婦で切り盛りしているようだ。奥さんは日系二世のような顔立ち。

ホテル・チョルカーナ

エントランス奥のテーブルでは、可愛い女の子が暗い中勉強していた。後で訊いたら８歳だという。

何かとてもアットホームなホテルなのだ。日本人がときどき泊まるのか、主人はひょうきんな日本語を話す。彼は日本人がシャワーでなく風呂が好きということを知っていて、私の部屋にはとても立派なバスタブが付いていた。部屋に戻り一風呂浴びてビールを飲もうと、主人に言ってビールの大ビンを１本もらい栓を開けてもらった。明日の飛行機の出発時刻を言い、何時間前に空港に行けばいいかと質問したところ、主人は２時間前，奥さんは１時間前という。主人が国内線でも２時間前に行かなければならな

いと強く言うので、それに従って２時間前に空港に着くようにタクシーを予約してもらった。
空港からここまでいくらだったか？と訊くので４人で６０ソルだというと、それはリーズナブルだという。主人はホテルから空港まで４５ソルで行けるというので、１４：５０分のフライトに間に合うように１１：５０分にタクシーを呼んでもらうことにした。
栓を抜いたビールとグラスを持ちながら、大声でそんな話を延々としていたら手が痺れてしまった。これで指を滑らせたらビンが床に落ちて割ってしまいそうだ。とにかく親切で面白い主人だ。
熱い湯からあがり少し冷たさの戻ったビールを飲む。空気が乾燥していて体の水分が奪われているためかビールがすいすい入っていく。一息ついてパソコンでメールのチェック。
ホテルの部屋は Wi-Fi で無線ＬＡＮに繋がるので、インターネットやメールができる。昨日のＮさんの旅ブログを Google で検索しようとするが、教えてもらったキーワードが違うようでどうしても見つからない。メールでもう一度聞き直す。そのメールアドレスも書いてもらったものではなく聞き取ったものなので、本当に届くかどうかわからない。
夜８時を回って外は真っ暗になったが、治安はさほど心配なさそうなので夜の街に食事に出る。ホテルからあまり離れないつもりなので問題ないだろう。相変わらず大通りに通ずる脇道は車で渋滞している。
歩いて５，６分のところにレストランが集まっている一郭があるが、客引きがたくさんいて料金を見ると２０～３０ソルと決して安くない。リマの食事の相場はそれほど安くないのだ。このあたりはあまり雰囲気がよくないので、大通りを渡ったところのファミレスのような店に入る。
牛肉や鶏肉など肉料理が多い店だった。
Caldo de Gallina（カルド・デ・ガジーナ：若鳥のスープ）とピスコサワーを注文。中くらいの大きさの深い器に、ダシの効いた塩味のスープとブツ切り若鳥の大きな塊とジャガイモ丸々１個，スパゲティが入っている。好みの味だった。鶏肉は地鶏なのか、とても身がしっかりして固くナイフとフォークでは持て余してしまうくらいだ。汗をカキカキ食べ満腹になった。

カルド･デ・ガジーナ

カルド・デ・ガジーナは１２.９ソル，ピスコサワーの方が高く１３ソルだった。これで日本円で１，１２０円ほどだから決して安くはない。ホテルに戻る前に曲がり角にあるスーパーに寄ってみる。調味料の棚を見ていたら、ジャックダニエルのバーベキューソースがあり驚いた。私の知っているジャックダニエルはバーボンウイスキーのメーカーだ。それと味の素の醤油。ビールは山ほどあるがウイスキーは全くなかった。南米ではウイスキーはあまり一般的でない。どこの街に行ってもスーパーを見て回るのは楽しい。
ホテルに戻ったのは９時過ぎ。部屋に椅子がないので借りようとしたら、当然テーブルも必要だろうということで、テーブルと椅子を部屋に運んでくれた。記録を書こうとするが、昨日の寝不足のせいかとても眠くてどうしても書けない。

２月８日（土）リマからアレキパへ

朝４時半に目覚めた。昨日書けなかった記録を書いてメールのチェック。Ｎさんのブログがやっと見つかってコメントを書いた。コメントがすぐ載らなかったので、勘違いしてもう一度同じようなコメントを書き込んでしまった。ソチオリンピックの情報をインターネットのニュースで見るが、まだ開会式のニュースしか載ってなかった。
６時半になりもう一度眠ろうとするが目が冴えて眠れない。外からはもう車の通る音が聞こえてくる。熱い湯に浸かり、７時半頃出掛ける準備をする。ホテルを出るときはいつも万全のセキュリティを意識しなくてはならないので大変だ。１階の食堂でパンとコーヒー、フレッシュジュースと目玉焼きの朝食。
どうも昨夜から腹の調子が良くない。それでもミルクコーヒーとフレッシュジュースを飲む。そのうち

もう一度ミラフローレス海岸

腹の具合も良くなるだろう。

８時半にホテルを出て、昨日行った海岸の方に行ってみる。今日は海岸を中心に少し足を延ばしてみることにする。

恋人広場から少し北の方向に行くと灯台のモニュメントがあり、なだらかな海岸線のカーブが見える。

今日は土曜日で休み、海岸の遊歩道をジョギングしたり、犬と散歩する市民の姿が見られる。

歩道の脇に自転車専用道路も併設されていて、時折マウンテンバイクで走り抜ける人がいる。空はどんより曇っていて、沖の方は霞んで良く見えないのが残念だ。崖下に下りてみたいがどこから行けるのかわからない。来た道を戻りかけると下に行く階段を見つけた。延々と下に続く階段でかなり大変。下りきったところで道路を横断し、海岸線と平行に通っている道路の歩道橋を渡るとやっと砂浜にたどり着いた。この海岸は波が荒くサーフィンをしている人が多い。

崖下に下りてみた

ここからは崖を見上げるかたちになり、切り立った荒々しい岩肌が見られる。リマの海岸は変化にとんだ特徴のある海岸である。人々は思い思いに海岸を散歩したりサーフィンをしたりしている。ミラフローレス海岸では市民がレジャーを楽しんでいる姿があった。次は街中を歩いてみる。

リマの街角

階段を上がり崖の上に戻る。階段は全部で３５０段もあり、上りきるのに大汗をかいた。来た道をホテルの方向に戻り、道に迷わないように注意しながら歩く。１０時を過ぎて太陽が顔を出した。日差しが強くなり、正面から光を受けると昨日日焼けしたところが痛いほどだ。

ずいぶん歩いたので、ホテル周辺のミラフローレス地区の様子もわかってきた。腹の具合が良くないので無理せず、早めにホテルに戻りシャワーを浴びる。湯が出なくなってしまい水風呂に近いが、汗を流してさっぱりした。２泊分の支払いを済ませ、帰国直前の３月３日にリマでもう一泊するため予約をした。

主人（クリスチアン）に呼んでもらったタクシーで空港に向かう。空港から来たときは深夜だったので３０分ほどで来たが、日中は道路が混雑するので１時間見なくてはならない。

タクシーの運チャンは陽気な人で雑談しながら行く。今度リマに来たら電話で呼んでくれと名刺をくれたので、３月３日にまた来るからその時頼むというと立派なノートに書き込んだ。これは本気だと思い、だいたい夜１０時ころ空港に来てほしいと予約した形になった。空港に迎えのタクシーが来てくれるのであれば心強い。顔を覚えているので多分大丈夫だろう。3月３日にはホテルも予約していることを伝えた。彼はホセ・ルイス・ロドリゲス・ガロという名だと言った。空港には１２：４５分に着いた。

チェックインが捌けず、手続きが終わるまでに４０分ほどかかった。やはり国内線でも２時間前には空港に来ていなければならないわけだ。私の場合は言葉が十分でないのでなおさらだ。クロワッサンとミルクコーヒーで昼食を済ませ、セキュリティチェックを受けて９番ゲートで待っていると、出発ゲートが

１６番に変更になった。空港内は Wi-Fi が繋がると案内表示があり、やってみたがＰＣの表示は接続されたようになっていても結局繋がらなかった。

アレキパへは１時間半ほどのフライトであっという間に着いてしまった。それなのに搭乗手続きに２時間も見なければならないのは何とも非効率的だ。

荷物を引き取ってすぐタクシーと交渉。ホテルも一緒に紹介してもらう。アレキパはペルー第二の都市とのことだが、リマに比べたらケタ違いに小さい。市内までは車で２０分ほど。とても乾燥した街という印象。近くに４，０００メートル級の山が見え景色はいい。鉄道の線路が見えたので訊くとクスコに通じている鉄道とのこと。鉄道にも乗ってみたい気持ちはあるが、本数が少なく発車時刻が不明確なので難しいだろう。ホテルは三星ホテルとのことだが、１０５ソルにしてはレベルが低い。でも後から来た客には１２５ソルと言っていたようなので、１０５ソルは妥当な値段と思うことにした。
部屋に荷物を置き、すぐにマヨール広場辺りを散策する。日は落ちかけていて広場周辺は凄い人である。

アレキパのアルマス広場も、インターネットでは観光客が首締め強盗にあったというようなことが書かれていた。そのためか今は警官が何人もいるので危険な感じは全くない。

アルマス広場

このアルマス広場は、スペイン統治国にある最もよく見るタイプの広場である。四角い広場の周りは教会や市庁舎に囲われ、中央には誰か偉人の像が立ち、噴水があり一面花が咲き乱れている。教会の姿は見事の一言だが、近づくと標準レンズでは入りきれないし、遠方から全体を写真に納めようとすると樹木があるので隠れてしまう。

明日のコルカ渓谷のツアーを探さなくてはならない。ツアーを催行する会社はすぐに見つかった。ツアー料金は４５ソル、それに昼食代が７０ソルで合計１１５ソルだった。昼食は食べないから払わないということはできなくて、必ず払わなければならない決まりらしい。ツアー料金より昼食代の方がずっと高いというのはどういうことだろう？

アルマス広場

朝３時出発で夕方５時に戻るという。早朝というよりは深夜に出発するこのツアー、もう少し後ろ倒しにできないのだろうか。目的地が遠いことや食事や訪問地の時間的な都合があるのだろうが、それにしても午前３時は早すぎないか？

ぶらぶら歩いてレストランを探す。昨日の夕方ころから本格的に腹の調子が悪い。今日の朝も下痢だったので水分はあまり採らないようにした。昨夜と同じカルド・デ・ガジーナを注文。飲み物は持ち歩いているミネラルウォーターを少しずつ飲む。昨日より塩分が多く、鶏肉は同じように固く食べにくい。

時々腹が痛くなるのでほんの少ししか食欲がなく、ほとんど残してしまい店の人に申し訳なかった。

ライトアップされた教会

レストランから出るともう日が沈んでいてライトアップされた教会が浮かび上がって美しい。

ホテルに戻り明日の朝に備え早めに寝ることにする。下痢はさらにひどくなり、明日１４時間のツアーに耐えられるかどうかとても不安だ。トイレ休憩まで下痢で漏らさないかが一番心配。

眠ろうとしても眠れず、ほんの少しウトウトするだけで腹のことが気になる。２時間くらいおきにトイレに行く。セビーチェのような生ものを食べ、ビールを飲んだせいだろうか？今になって悔やまれる。変な病気でなければいいが。どうしても下痢が治まらない場合は、ツアー中止も考えなければならないかも知れない。ほとんど水分を採っていないのに体の水分がどんどん出ていくようで怖しい。

夜のうちに出すだけ出してしまい、治まることを祈る。だたし、治まったとしても問題は体力だ。二日間も満足に食事も水分も採らずに長時間のツアーに耐えられるだろうか？とにかく明日の体調を見て、出発してしまったら頑張るしかない。

２月９日（日）コルカ渓谷ツアー

昨日は下痢の心配と体力回復のことを考えてしまい結局ほとんど眠ることができなかった。体の方は何とかなりそうなので、とりあえず出発する。３時２０分１階に下りていくと、すでに３人がいて迎えを待っていた。私は３時といっても迎えは３時半ころにならないと来ないと思っていた。結局そこで２０分待って３時４０分に迎えが来た。呼ばれたのは私一人だった。先に待っていた３人は別のツアー会社のようでさらに待たされたと思う。マイクロバスに乗り込むとき元気よく朝の挨拶をしたが、バスの中のほとんどの人はまだ眠っているようだった。私のあとさらに３組ほどの客を迎えに行き、４時にやっと目的地に向かって出発。本格的に走り出すと車の中はとても寒く、備え付けの毛布を足元に巻く。外はまだ真っ暗で何も見えないので寝るしかない。１時間ほど走り５時頃になると、外が薄っすらと明るみ始めた。

６時１０分、今回のツアー最高地点の標高 4,830m の Patapampa（パタパンパ）に到着。ここから 5,000m級の山々を眺める。標高が非常に高いのと、昨日の寝不足からか不意に“クラッ”ときて呼吸も少し苦しかったが、頭痛や吐き気などは思ったほどではなかった。ボリビアのラパスに行った時よりはずっといい。

遠くの山はウアルカ山

冬は−２５〜−２０℃になるというが、夏は５〜６℃とのこと。遠くに見える雪山の写真を撮る。ここは標高が高いので、山自身はそれほど高く感じない。

パタパンパから少し走り、標高 3,630m の Chibay（チバイ）村に到着。６時半、朝食のレストランに入る。私はまずトイレに駆け込むが、下痢はほぼ止まっていた。今日は腹の調子を回復するために食べないことに決めているので、朝食のテーブルに着いてもハーブティーとコカティーをカップ半分ほどしか飲まなかった。本当は腹ペコですぐにでも食べたかった。ツアーのメンバーには腹の具合が悪く、食べられないと言っておいた。

ジャンケ村

朝食を終え Yanque（ジャンケ）村など、いくつかのアンデスの村を見ていく。観光客相手のリャマと一緒に写真を撮って５ソルほどチップを渡す。こういうのはあまり好きではないが、やはり村や彼らのことを考えてしてあげないといけない。

ツアー客は「ペルー人」か「学生」かなどによって料金が割り引かれ、身分証明書を見せることによって負担が２０ソルに減らされる。私はどれにも該当しないので負担は最大の７０ソルだ。昨日のツアー会社の説明は全くいい加減で、この７０ソルというのは、いわばこの地域の自然環境保護や村人たちへの援助金的なものと考えておけばよさそうだ。

１０時半にいよいよコンドルが見られるという、3,500m地点の Cruz del Condor（クルス・デル・コン

ドル）に着く。ここが今回のツアーの最終目的地だ。夏の今頃はコンドルの姿が見られる確率は低いのだという。ここでは１時間ほど自由時間で、コンドルが現れるのを待つ。

マカ村

谷は深く、谷底にはキラキラ光る川が流れている。日差しは強烈で、普通の場所の紫外線の１.５倍だという。日焼け止めクリームは必須というが、私は持っていないので帽子で日光を遮った。

コンドルの気配が全くないので、こんなものかと半ば諦めていたところ“コンドル！”と叫ぶ声がして、大空を見上げると小さくコンドルの飛ぶ姿が見えた。天に向かってピントを合わせようとしても合わせられず、オートフォーカスのカメラのシャッターが落ちない。コンドルは結構近づいてきたのだが、残念ながら大きく羽を広げて飛ぶ姿は撮り損ねてしまった。来る前は谷の下を大きく羽ばたく姿をイメージしていたが、見られたのは谷の遥か上の方だった。それでも諦めかけていたコンドルが見られたので良しとしよう。

谷を眺めるツアーメンバー

昼食の時間になり、バスの中でガイドから昼食のメニューが詳しく説明された。要するにバイキングでどんな食べ物があるかを説明してくれたのである。１人２５ソルとのこと。私はどうせ食べるつもりはないので聞き流していた。昼食の間の１時間は辛かったが、バスの中でウトウトしていた。実はバスの運転手も私と同じように食べていないのは救いだった。

最後にプールのある、村の遊園地といったところに寄る。ここでは時間は１５分という説明だったので、橋や川の写真を撮ってすぐにバスに戻ったのだが、多くのメンバーがなかなか戻らず、結局１時間後に全員そろい出発。とにかく時間はいい加減なのだった。

アンデス山中の深い谷

ここを出ると一路アレキパに帰る。時刻は１４時頃だった。走っている途中にアルパカやビクーニャがいればそこで止まるとのこと。そのいずれも群れを見ることができた。道はガタガタの悪路から舗装道路になり揺れが少なくなった。帰りの車中、ガイドさんはスペイン語と英語で交互にいろいろ説明してくれるが、朝が早かったためほとんどの人はウトウトしている。そんな中１７：２０分アレキパのアルマス広場に戻ってきた。

コンドルが来るコルカ渓谷

今日一日、出発して途中まではとても不安だったが、特に問題なく何とか長時間のツアーに耐えられ本当に良かった。ホテルに戻る途中、アレキパからチリのタクナへのバスチケットを売る店を見つけて購入。目的地のアリカまでの切符はないか訊くが、タクナで乗り換えだという。とにかくタクナまで行こう。広場に面してスーパーがあった。腹の具合も少し良くなってきたようなので、食べ物，飲み物などを買う。ホテルに戻りシャワーを浴び、案外自分の体力があることに自信を持った。

このホテルもWi-Fiが簡単につながりメールのチェック。今日の記録を書こうとするが眠気には勝てず、一旦眠ってから書く。